

特集

不妊と不育の新たな課題

企画者のことば

末岡 浩*

生殖医療はすでに技術的な安定と普及を通じてわが国の人口の保持にも深くかかわる重要な位置づけを確立している。これまでの技術の発展も急速にかつ大胆に進んできたことは周知の事実であるが、なお一段と広く普及し、全国に浸透している。さらに技術の発展はゲノム医療や再生医療へも範囲を広げようとしている。

しかし、そのなかで医学的有効性について科学的なエビデンスを求めることは必ずしも容易ではない。また、加えてその医療に求めるニーズや社会倫理的な課題を含め常に多くの議論の中心となっている。

不妊・不育の医療はともに子を望んでいてもなかなか授かることのできない人々への医療として、その目的は共有している。妊娠の成立と

その後の成育は一連の作業であり、この分類をまったく切り離して考えることができないことも事実である。これらの治療を一連の病態としてとらえ、そのための医療を連携して推進することが必要とも考えられる。すでに一部では現実的に不妊診療のなかで妊娠成立後の病態を想定した上で診療にあたる動向も散見される。この背景のなかで本特集では産婦人科医が最もアップデートの先進的医療技術の取り組みについて理解し、今後、医療の進む方向性を考える一助となることを想定して企画した。

各分野の専門家に現状の取り組みを解説していただき、今後の方向性について認識を深める特集となれば幸いである。

*K. Sueoka 慶應義塾大学医学部産婦人科(准教授)